

戦時下の京都帝国大学

駒込 武（教育学部）

- 資料1：『京都帝国大学新聞』第364号（1943年5月20日付）
- 資料2：「日本諸学振興委員会学会開催一覧」（駒込武・川村肇・奈須恵子『戦時下学問の統制と動員』東京大学出版会、2011年）
- 資料3：「日本諸学振興委員会常任委員一覧」同上書
- 資料4：野間光辰「都の錦の悲劇」文部省教学局編纂『日本諸学研究報告 特集第6篇 国語国文学』1942年11月
- 資料5：西尾実「国語国文学特別学会所感」『日本諸学』第2号、1942年
- 参考：駒込武「天皇機関説事件以後の学問空間」『UP』第40巻第7号

- ・「本年度科学研究費／本学関係は百二十一件」

- 1932年 財団法人日本学術振興会の創設
- 1939年 文部省科学研究費の創設。予算約300万円。当初は自然科学のみを対象。
- 1940年 吉田熊次・本田弘人『文科諸学の研究及奨励に関する調査報告』刊行。
- 1943年 文部省科学研究費の交付対象が人文科学部門にも拡大。予算570万円。
- 1945年 帝国大学に事務局長を設ける。京都帝大では本田弘人が事務局長に就任。

- ・「月曜講義題目決定 “大東亜建設の理念”を中心」

- 1938年 第一回月曜講義。夜7時から法経第一教室で開催、講師は西田幾多郎。
- 1943年 「大東亜建設の理念」を主題として連続講義。講師は田辺元、高坂正顕ら。

- ・「文化建設を主題に／於本学／教育学特別学会」

- ・1935年天皇機関説事件→1936年日本諸学振興委員会設置→1937年教学局設置
- ・「国体、日本精神ノ本義」に基づいた研究の「振興」を目的として学会を開催。学会の報告者は委員によって使命、参加者の範囲は主に高等教育機関の教員、中等教育機関の教員に限定。
- ・次第に「国体明徴」という目的が後景に退き、学問研究を「国家有用」な方向に統制しつつ動員する性格が強まる。

- 「統制」の中の「自由」、あるいは「自由」の中の「統制」という問題

「統制は自由の抑圧ではなくて、却って或る特定な自由を他の不利有害な自由から護ることによって、結果に於ておのずから之を実現することになる、ということを意味する。停滞させられた可能性から見れば、統制は自由の抑圧（実は自由への転化の阻止）だが、自由展開に放任された可能性から見れば、統制はそれ自身自由を意味するわけである。」（戸坂潤『現代唯物論講話』1936年）

- 学問研究が「役に立つ」とはどういうことだろうか…？

表4 日本諸学振興委員会 学会開催一覧

凡例：日本諸学振興委員会各学会および公開講演会の開催期日、出版物の略称、学会開催場所、公開講演会開催場所を記す。○数字は学会ごとの整理用回数として本書で付したものであり、かならずしも『日本諸学振興委員会研究報告』などの資料に記されたものではない。また、「報告1」「特輯1」「講演集1」などの表記は、『日本諸学振興委員会研究報告』などの出版物の略称で、告1」「特輯1」「講演集1」などの表記は、『日本諸学振興委員会研究報告』などの出版物の略称で、

年	教育学	哲学	国語 国文学	歴史学
1936	①11/4-6 報告1 文部省、東京商大 一橋講堂			
1937		①10/7-9 報告2 文部省、日比谷公 会堂	①11/4-6 報告3 文部省、日比谷公 会堂	
1938		②7/19-21 【特別】 特輯1 文部省		①6/30-7/2 報告4 文部省、日比谷公 会堂
1939				
1940	②10/24-26 報告10 文部省、共立講堂	③6/27-29 報告8 文部省、日比谷公 会堂		②11/7-9 報告11 文部省、日比谷公 会堂
1941	③11/10-11 【特別】特輯5 文部省、共立講堂	④4/18-19 【特別】特輯2 京都帝大、朝日会 館	②6/19-21 報告12 文部省、共立講堂	③9/20-21 【特別】特輯4 東北帝大、斎藤報 恩会講堂
1942	④8/6-8 報告18 講演集3 広島文理科大、袋 町国民学校	⑤11/5-7 報告19 講演集7 文部省、共立講堂	③5/15-16 【特別】特輯6 講演集4 奈良女高師	④6/25-27 報告17 講演集2 文部省、共立講堂
1943	⑤5/14-15 【特別】特輯10 講演集9 京都帝大、朝日会 館	⑥7/22-23 【特別】特輯12 講演集12 東北帝大、斎藤報 恩会講堂	④5/3-5 報告20 講演集11 文部省、共立講堂	⑥10/27-29 【報告23】 講演集15 九州帝大、西日本 新聞社講堂
1944	6/5-7⑦哲学・⑥教 育学【聯合】文部 省	(教育学と同じ)	⑤6/22-23 【中止】神宮皇學館 大学	11/9-11 ⑥歴史学・②地理 学【聯合】山梨師 範学校
1945	⑦7/18-19 長野師範学校	⑧6/27-28 京都帝大	⑥6/6-7 教学鍊成所	

典拠：学会各回「要項」(卷末附表1)、文部省教学局「日本諸学振興委員会要項」(1944年3月)、『日本諸

刊行の確認できない号は〔 〕で示した。出版物の正式な名称については卷末附表3『日本諸学振興委員会研究報告』一覧、卷末附表4『日本諸学講演集』一覧により確認されたい。開催場所が2つ記されている場合、前者が学会の開催場所、後者が公開講演会の開催場所を表す。

経済学	芸術学	法学	自然科学	地理学
①10/6-8 報告5 文部省、日比谷 公会堂				
	①10/18-21 報告6 文部省、日比谷 公会堂	①11/9-11 報告7 文部省、日比谷 公会堂		
②7/4-6 報告9 文部省、日比谷 公会堂				
③5/16-17 【特別】特輯3 大阪商大、中之 島公会堂	②10/23-25 報告13 京都帝大、三高、 日出会館	②11/20-22 報告14 文部省、共立講 堂		
④4/20-22 報告16 講演集1 文部省、共立講 堂	③10/21-22 【特別】特輯8 講演集6 文部省、共立講 堂	③8/27-28 【特別】特輯7 講演集5 京都帝大、朝日 会館	①3/24-26 報告15 東京帝大、共立 講堂 ②11/12-13 【特別】特輯9 講演集8 名古屋高等工業 学校、名古屋市 公会堂	
⑤11/9-10 【特別】特輯13 講演集16 神戸商大、神戸 市立海員会館	④6/9-11 報告21 講演集13 文部省、共立講 堂	④10/5-7 【報告22】 講演集14 文部省、共立講 堂	③6/29-30 【特別】特輯11 講演集10 文部省、共立講 堂	①11/25-26 【報告24】 講演集17 文部省、東京女 高師
7/12-14 ⑤法学・⑥経済 学【聯合】東北 帝大	⑤10/12-13 奈良女高師	(経済学と同じ)	④9/14-15 金沢医科大学	(歴史学と同じ)

学】第5号(1944年12月)、『読売新聞』1945年6月28日付、『京都帝国大学新聞』1945年7月11日付。

表3 日本諸学振興委員会常任委員一覧

凡例：日本諸学振興委員会常任委員への在任が確認できる年度に○を附した。氏名欄の括弧は重複して登場する人物、●は常任委員と教学局参与を兼ねる時期、■は常任委員を兼ねずて教学局参与をしている時期を示す。

役職	氏名	官職等	'36	'37	'38	'39	'40	'41	'42	'43	'44
委員長	河原春作	文部次官		○				■			
委員長	伊東延吉	文部次官		○		■	■	■			
委員長	菊池豊三郎	文部次官		○	○				○		
委員長	小林光政	教学局長官			○						
委員長	藤野恵	教学局長官、文部省総務局長			○	○	○	○			
会長	岡部長景	文部大臣					○				
副会長	(菊池豊三郎)	文部次官					○				
常任委員	宇野哲人	東京帝国大学名誉教授	○	○	○	○	○	○			
常任委員	筑克彦	東京帝国大学名誉教授	○	○	●	●	●	●	●		
常任委員	紀平正美	教学鍊成所鍊成官	○	○	○	○	●	●	●	●	○
常任委員	黒板勝美	東京帝国大学名誉教授	○	○	○	○	○	○			
常任委員	河野省三	國學院大學教授	○	○	○	○	○	○			
常任委員	小林澄兄	慶應義塾大学教授	○	○	○	○	○	○			
常任委員	斎藤常三郎	神戸商科大学教授兼京都帝国大学教授	○	○	○	○	○	○			
常任委員	作田莊一	京都帝国大学教授	○	○	●						
常任委員	篠原助市	東京文理科大学教授	○	○	○	○	○				
常任委員	高楠順次郎	東京帝国大学名誉教授	○	○	○	○	○	○			
常任委員	田辺元	京都帝国大学教授	○	○	●	●	●	●	○		
常任委員	長沼賢海	九州帝国大学教授	○	○	●	●	●	●	○		
常任委員	西晋一郎	広島文理科大学教授	○	○	○	○	○	○			
常任委員	西田直二郎	京都帝国大学教授	○	○	●	○	○	○			
常任委員	浜田耕作	京都帝国大学教授	○								
常任委員	深作安文	(元) 東京帝国大学教授	○	○	○	○	○	○			
常任委員	藤村作	東京帝国大学名誉教授	○	○	○	○	○	○			
常任委員	山内正暉	東京商科大学教授	○								
常任委員	山田孝雄	神宮皇學館大学長	○	○	●	●	●	●	○		
常任委員	吉江喬松	早稻田大学教授	○	○	○						
常任委員	吉沢義則	(元) 京都帝国大学教授	○	○	○	○	○	○			
常任委員	吉田熊次	東京帝国大学名誉教授	○	○	○	○	○	○			
常任委員	阿原謙藏	教学局長官、国民教育局長	○	○			○				
常任委員	植田寿藏	京都帝国大学教授	○	○	○	○	○	○			
常任委員	葛西千秋	教学局长	○	○	○						
常任委員	孫田秀春	教学局教学官	○	○							
常任委員	山川建	文部省専門学務局長	○	○							
常任委員	辻善之助	東京帝国大学名誉教授	○	○	○	○	○	○			
常任委員	土方成美	東京帝国大学教授	○								
常任委員	和辻哲郎	東京帝国大学教授	●	●	●	●	●	○	○		

役職	氏名	官職等	'36	'37	'38	'39	'40	'41	'42	'43	'44
常任委員	関口鯉吉	文部省専門学務局長							○		
常任委員	藤本万治	教学局部長、東京第一師範学校長						○			○
常任委員	穂積重遠	東京帝国大学名誉教授						○	○	○	○
常任委員	安井章一	教学局部長						○			
常任委員	朝比奈策太郎	教学局部長						○			
常任委員	近藤寿治	教学局部長、文部省教学局長						○	○	○	○
常任委員	高田保馬	民族研究所員						○	○	○	○
常任委員	永井浩	文部省専門教育局長						○	○	○	○
常任委員	森莊三郎	東京帝国大学教授						○	○	○	○
常任委員	藤懸静也	(元) 東京帝国大学教授						○	○	○	○
常任委員	堀池英一	教学局部長						○	○		
常任委員	高木貞治	東京帝国大学名誉教授						○	○	○	
常任委員	松井元興	京都帝国大学教授						○			
常任委員	生悦住求馬	文部省科学局長						○	○		
常任委員	石橋五郎	京都帝国大学名誉教授						○	○		
常任委員	大類伸	東京帝国大学講師						○	○		
常任委員	安倍能成	第一高等学校長						○			
常任委員	石橋智信	東京帝国大学教授						○			
常任委員	入沢宗寿	東京帝国大学教授						○			
常任委員	内田祥三	東京帝国大学総長						■	○		
常任委員	宇野円空	東京帝国大学教授						○			
常任委員	岡田武松	(元) 東京帝国大学教授						○			
常任委員	河原春作	東京文理科大学長						■	○		
常任委員	桑木或雄	九州帝国大学名誉教授						○			
常任委員	小泉信三	慶應義塾大学長						■	■	■	■
常任委員	清水虎雄	文部省科学局長						○			
常任委員	下村寿一	東京女子高等師範学校長						○			
常任委員	高木市之助	九州帝国大学教授						○			
常任委員	高瀬莊太郎	東京商科大学長						○			
常任委員	高田真治	東京帝国大学教授						○			
常任委員	田中穂積	早稻田大学長						○			
常任委員	塚原政次	広島文理科大学長						○			
常任委員	橋田邦彦	教学鍊成所長						■	■	■	○
常任委員	羽田亨	京都帝国大学総長						○			
常任委員	久松潛一	東京帝国大学教授						○			
常任委員	(藤野恵)	文部省総務局長						○			
常任委員	八木秀次	東京工業大学長						○			
常任委員	矢野仁一	京都帝国大学名誉教授						○			

典拠：各年度『文部省職員録』、『官報』

注1) 官職等は委員就任時のものを記入した。

注2) 並び順は委員長・会長・副会長と常任委員を区別した上で、就任年度順、同じ年度内では五十音順である。

都の錦の悲劇

浪速高等学校教授 野間光辰

(4)

私は近世の小説を調べて居りますので、今日は表題に掲げましたやうな、都の錦の生涯について申し上げて見たいと思ふのであります。都の錦の生涯は一口に申しますれば、「假面と虚偽の生涯」であります。少くとも、奇矯な物の云ひ方をいたしますならば、彼は假面を被らなければ物の眞實を語ることが出来なかつた男、或は「全身を嘘で武装して居た人間」であります。もつと云ひますならば、嘘つきの天才であつたとさへいふことが出来るかも知れないのです。事實彼ほど、嘘をつくことを好み、又それを唯一の快樂とした人間は、一寸他にその例を見ないやうであります。私は彼の生涯を通觀致しまして、彼が終生を假面と變名との下に隠れて、世間を欺き續け、單に世間を欺くばかりでなく、己みづからをも欺いて、假面を被つたまゝ變名に隠れたまゝ、赤の他人になりますまして、遂に異郷の空に死んで行つた彼の生涯をこれから申し上げてみたいと思ふのであります。

今一つの元禄時代の大きな悩みは、熱病のやうな狂氣と倦怠であります。人々は健康な肉體を持ってあましに退屈しきつてゐる。一體元禄時代は、情熱的な、活氣に富んだ、激烈とした時代のやうに考へられて居りますけれども、一面それは、いかに底知れない倦怠に捉へられてゐたかといふことを物語るものである。過剰な精力と感情の捌け口に窮した人々は、次第に物狂はしくなつて来る。『徳川實記』や『當代記』を見ますと、喧嘩・刃傷・斬殺等の血腥い事件や背徳行為の數々がいづれも「狂氣」・「亂心」で以て説明せられて居りますが、それは必ずしも法律的責任を回避するための口實ばかりとは考へられません。理性と感情の均衡を失つてしまつた時代の現象としては、何等怪しむに足りないことがあります。かゝる時代には、學問も教養も全く無力であります。理性の權威を主張し、道徳の嚴肅を説くに、何程の寄與をもなし得ない。といふのも、學問や教養そのものが、この時代には退屈を紓らす一つの手段に過ぎなかつたのであります。その最も顯著な實例は五代將軍綱吉の好學であります。たゞさうでないとしても、この時代の學問や教養は單なる知識の範囲を出でない。否、學問を教養を身につけようとする多くの者の態度が、知識を豊かにし見聞を弘めるといふ程度にしか至つてゐない。學問や教養によつて自己を深め、又高めようといふが如き自覺にまで到達してゐないのであります。隨つて當時の學問あり教養ある人間といふのは、博識ではあるが單なる常識家であるか、もしくは圓満な社交人であるかに過ぎなかつたのであります。都の錦の如きも、かゝる時代の狂氣と倦怠に激しく取憑かれた一人であります。彼が「終に艶色におぼれて」身を誤つに至つたのも、しばそのためでありますし、又彼が馬鹿げた空虚な自己宣傳に熱狂して行つたのも、一面さうした狂氣の所爲であります。その場合、彼の學問や教養は、自己を數くことにしか役立たなかつた。これも亦時代の大きな苦悶の一つのあらはれであります。

恐らく都の錦は、もとより純真な、人並な立身出世の希望に燃え、眞面目に學問を勵んでゐた青年であつたらうと考へます。彼の文學に於ける事業を見ましても、いづれも僅かにその片鱗を示すに止まつては居りますが、古典の俗譯にしろ文藝時評にしろ、多分に天才的な創意を持つてゐる。しかもあゝした欺瞞の生涯を歩まなければならなかつたといふのは、もとより彼自身の性格にもよることであります。その背後に彼の生きた時代の憂鬱や悩みが強く彼を捉へてゐたことが見遁せないのであります。その意味に於て彼の生涯は一つの悲劇であつたといふことが出来るであります。

といふやうに、後代の文學を對象としたものである。

大東亜新秩序の建設といふ主張からいふと、
史的發展として跡づけられるやうな言語事實、文學事實
がまづ擧げられ、漸次多くなつてきた大東亜各地域との
文化的交渉も考へられる筈であるが、發表のすべてには
さういふ意圖が滲透してはゐなかつた。山岸氏は、一言
極めて重要な一事實を指摘せられたけれども、發表の直
接問題は他に存したといつても過言ではないであらう。

つた。討議の席上、私は氏の研究發表について、氏に都の錦の文學史的意義をどう考へてゐられるかをお尋ねし、併せて、近世文學研究諸家に、皇國文學の發展における近世文學の意義をどう考へるべきかをお尋ねせざるを得なかつた。といふのは、この二日間の講演と研究發表及び討議において、近世文學のある性質に對して、皇國精神の發展といふ立場から、肯定的な見解と否定的な

研究發表があつた。土井博士は耶蘇會士の日本語研究の方法と態度を述べて、大東亞共通語としての日本語問題に言及され、小林氏は仙臺方言語彙を江戸語と對照してある仙臺方言集「濱荻」を材料として方言の形成及び交流についての考察を發表され、金田一博士は前述したやうに、國語學における歐米文法の模倣脱却の要を品詞分類標準の批判によつて明かにせられ、國語學の自主性の確立が大東亞新秩序建設の基礎であることを論斷せらるた。

かくして、二日にわたる研究發表は終つたのである。
が、そして、大東亞新秩序建設の基礎たるべき聖國の精神は究められ、大東亞進出の心構へは説かれたけれども、聖國精神の史的發展を跡づけ、その發展的成果としての大東亞の文化なり、生活なりの建設を論じるといふ方向の考察には接し得なかつた。唯、劉氏の研究が、聖國精神の開明と共に、後代の來迎思想や聖靈會のやうな

完解とが示されたまゝ、何等の批判も行はれずに経過し
しまひさうになつたので、この特別學會に首尾あらし
めるためにも、また問題そのもののためにも、この學會
としての意向を明かにして置くべきであると考へたから
であつた。前者に對しては、野間氏から研究發表の補説
があつた。それは、大東亞新秩序建設に資するといふ方
向に立たれたものであるとは聽取れなかつたが、後者に
ついては小池藤五郎氏の發言があり、それに關聯して山
田博士の古事記所傳の意義に關する御話があつた。しか
し、皇國精神の發展における近世文學の意義といふこと
については、考へなくてはならない問題が遺されたまゝ
であつたやうに思はれる。

外來起源とせられてゐる思想、行事の一回りを以て國文學的なるものがこれを基礎づけてゐるといふ考察であつたのが、敘上の觀點から注目せられた。以上は、國語國文學特別學會における研究發表に關し、その主題を中心とした感想である。一隨つて、學的成績について云々したものではない。その點については、二日間を通じて眞に聽きごたへのある、よい學會であつたと思ふ。—それも、この特別學會の研究發表に關して、時局下における國語學・國文學の任務を反省しようとしたものであることを附言しなくてはならない。

(國語國文學臨時教材)

國語國文學特別學會所見

60年をむかへた時代と理論 審地正人――1

[中国の「ロハス」アフリカの「保定村」物語 中国人農業移民 川島 真――7

天皇機関説事件以後の学問空間 駒込 武――13

顕微鏡でのぞく記憶 19 しばし顕微鏡と別れる 塚谷五郎――19

[日本美術史案内] 27 あまりに遠し 佐藤康宏――20

<能力不安>の時代 中村高康――22



UNIVERSITY PRESS



7

創立60周年 ● Number 465, July 2011

東京大百科監修

- [進化的人間学] 8 ヒトの脳と行動の性差(1) 岩谷三川眞理子――28
 [「アラの春は夏を越えるか】 1 中東の政変は「想定外」だつたが 「カッサハンドラの予言」を読み返す 池内 恵――33
 島田謹一記念学藝賞と島田謹一先生を偲ぶ会 菅原克也――41
 [まことに物理カンタービレ] 23 バリーカーリックマディー小学校 太田浩――46
 [漢文ノート] 19 悅亡 齋藤希史――52
 すゞしる日記 第76回 山口 春――58
 学術出版――59 執筆者紹介――60

□P 墓田○著第7部（第4卷）1101年7月刊行（第4回中止）価格100円（1年分1000円割引、税込）

天皇機関説事件以後の学問空間

駒込 武

大学教育への着眼

『東京新聞』(1906年11月17日付)は、「一九三五年天皇機関説變えよ」学者への彈圧克明に米議会図書館 文部省の秘密文書保管と一面で報じた。常石敬一氏らが発見したこの資料から、文部省が全国の大字当局に対して憲法學にかかる講義内容の調査を依頼、担当者の講義要項を提出させるとともに、極秘の内に学生による講義ノートの点検まで行ったことがわかる。一人一人の憲法学者への対応も詳細に記されており、たとえば「速急ノ処置ヲ要ス」とされた関西学院大学教授中島重(憲法担当者)の場合、文部省は一九三五年九月に同大学教授の神崎驥一から事情聽取、中島による講義内容の監視を求め、場合によっては「退職」させる措置が必要と指示した。

文部省思想局(1944年設置)、およびその後身である教學局

「文部省關係文書」に關係資料が収められてくる。三六年六月、右の中島重への対応については、関西学院学院史編纂室所蔵

置づけが与えられる一方、自然科学系は一括りとされた。人文・社会系の学問、その中でも「国体明徴」にかかわりの深いと考えられた専門領域に比重を置いていたといえる。ただし、自然科学関係でも物理学の桑木茂雄、電気工学の八木秀次など著名な学者が常任委員に就任したほか、発表者中に湯川秀樹の名前も見出されるなど単純に軽視されていたわけでもなかつたことがわかる。

開催の順序については、法学会の開催が比較的遅かつた点が目に付く。東京帝大関係者の協力をとりつけるのが困難だったことによるものと考えられる。三六年当時東京帝大総長だった長与又郎の日記によれば、日本諸学振興委員会が設置される二ヶ月前、穂積重遠法学部長が「日本諸学振興学会」に関する件で来談、穂積は文部省から常任委員への就任を求められたが、「之を拒絶せり」と述べたという。長与自身も、「学会を文部省主催にて挙行するが如きは学問の性状を解せぬ俗論なり。到底話にならず」と怒りに満ちた所感を記している(『長与又郎日記』下巻)。ただし、三九年になると穂積は常任委員就任を受諾し、学会と同時に開催された公開講演会で講演も行った。どのような心境、あるいは戦略の変化があつたのかは定かではない。穂積にとどまらず、倫理学の和辻哲郎、経済学の中山伊知郎など海軍省調査課長高木惣吉大佐が組織したブレーン・トラストにかかわっていた学者たちが、この時期から日本諸学振興委員会にかかわり始めたことと関係している可能性がある。

るが如き思想に陥ることは嚴に之を戒めねばならぬ」と論じ、一定の学説の強要を戒めたことも記録されている。哲学会でも公開講演で西田幾多郎が独断的非合理主義への批判を述べ、日本諸学振興委員会の機関誌『日本諸学』の座談会では、和辻哲郎が、「神がかり」の没論理主義者として知られた哲学者紀平正美と激しい論争を交わした。当時和辻も紀平も日本諸学振興委員会の常任委員だったので、この座談会は委員会内部の路線対立を顕在化させる意味をもつていた。

文部省思想局・教学局による全国学会の組織化は、一定の学説による学界の統一という「成果」は生み出しえなかつた。ただし、当時の有力な学者を組織化するのにかなりの程度「成功」したことには注意してよい。西田幾多郎、和辻哲郎、末弘厳太郎などが從來の教學局の施策に批判的鋒先を向けたとして、それが他ならぬ教學局の設定した舞台で行われることによ

日本諸学振興委員会の開催した学会の内実は、今日一般にイメージされる学会とは性格を異にしていた。委員会以外には組織としての実体があるわけではなく、発表者や聴衆は学会のたびごとに大学など所属機関への照会を通じて動員された。「戰時經濟の諸問題」「大東亜ノ文化建設ト芸術及芸術学」というように、学会ごとに研究発表主題という形で共有すべき主題の方向性を示した上で、発表者は委員が選定し、時には発表題目今まで注文をつけた。分科会のようなものは設けられず、五〇名以上収容できる文部省の大会議室で大勢の聴衆を前にして発表させる形態が一般的だつた。マルクス主義者や天皇機関説論者は基本的に排除されていたものの、たとえば教學局による「要注意」教員調査でリスト・アップされていた経済学者東畠精一や社会学者新明正道なども発表者に含まれていた。

多くの発表者にとって、この官製の舞台は「国体明徴」というような政策目的に忠実な研究をしているかどうかを試される「踏み絵」の意味を備えていたと思われる。ただし、神がかりの日本主義が幅をきかせたわけでもなかつた。全般的にはアカデミックな手法を守りながら、「無難通過」を優先させたと思われる発表が多かつた。また少數ではあるものの、学問統制の動向への違和感、「ファッショ」的風潮への批判が表明されることもあつた。

たとえば、第四回法学会の公開講演では末弘嚴太郎(民法)が「何事も政治力を以つて自由自在に形成し得べし」と考へ

り、より多くの人が舞台上の出来事を注視する効果が計算されていたようにも思われる。

文部省人文科学員会

日本諸学振興委員会の事業は、敗戦をまたいで継続した。四年七月には長野師範学校で開催される教育学会に適当な教職員を出席させよといふ照会を教學局長が東京帝大総長に宛てて発し、東京帝大は助教授海後宗臣など六名を出席させるという回答をしている(東京大学大学史史料室所蔵「文部省往復」)。また、文部省は四五年六月に開催した哲学会の速記録を九月について研究発表者のもとに送付している。

天皇機関説事件への対応策として行われたはずの事業がこのように戦後まで存続したのは、一〇年のあいだに微妙にその機能を変質させたからでもあつた。そのことは、肩書きにより嚴

北大路書房

記憶と日常 現代の認知心理学2

日本認知心理学会監修 太田信夫・厳島行雄編

認知心理学の核をなす記憶研究の到達点を概観し、今後を展望する。とくに日常生活面や臨床面での記憶のメカニズムを詳細に論じる。

A5判 354頁 定価3,800円(税込)

社会と感情 現代の認知心理学6

日本認知心理学会監修 村田光一編

現代の社会的認知研究をベースに、社会的場面における認知の問題、認知と相互に影響し合つ感情の問題を検討する。

〒603-8303
京都市北区紫野十二坊町12-8
TEL.075-431-0361
FAX.075-431-9393
<http://www.kitaohji.com>

作宛てに中島の講義要項等をあらためて提出した。中島は三五年春の時点では機関説支持を表明して「学説ニ殉ズルハ本懐ナリ」と述べていたのだが、三六年の資料では「国体明徴」にかかる第二次声明に言及して天皇機関説の是非は「最早や学説の論議に委せられたる問題に非ずして、政府の公權的解釈に依りて一定せられしもの」と記している。学説の問題として心底納得しているわけではない、しかし、講義の場などでは政府の解釈に従うという姿勢を示しているわけである。

こうした調査はその後も継続した。しかも、調査対象は憲法

担当者だけでなく法学全般と経済学、さらには哲学や歴史学を含めて人文・社会系の学問領域全般へと時を追つて拡大された。教学局の官僚だった石井昂や小池行松の文書には「要注意」教員として延べ一七〇名あまりの大学教員がリストアップされ、「自由主義者ナリトノ風評アリ」といったコメントが記されている。調査の手法もさらに徹底して、試験答案の評価までもが記されていることもある。たとえば四一年に早稲田大学を追われた歴史学者京口元吉の場合、試験の答案で「マルクス主義文献ニ基キ作成スルモノハ何レモ良好ナル成績ヲ獲得」したと報告されている（東京大学史史料室所蔵小池行松関係文書「極秘・思想調査人名一覧」）。

思想局・教学局は、おそらく学生の中から「協力者」をえて講義ノートや試験の答案まで調べたわけである。同様の事態はすでに京大瀧川事件でも見られたものの、これほど組織的に大

学における教育活動が着目を集めたのは前代未聞のことだった。あたかも独立した小世界であつたかのような講義室に監視の視線が及ぼされることになり、教員からすれば学生により「密告」される恐れさえ感じざるをえない状況が生じていた。天皇機関説事件が一過性のものではなく、その後の大学における日常を深く浸食する契機となつたことを物語る事実といえる。

全国的学会の組織化

教育活動への詳細な監視は、政府・文部省にとつて不ガティブなものを排除するための措置ではありえても、それだけでは「国体明徴」に資する研究を生み出すことはできなかつた。アカデミズムに影響力を及ぼすためには、専門分野で蓄積されたディシプリンをふまえる必要があつた。そこに学問統制の主体の側における、固有の「困難」が存在した。

同時代人としてこの問題を鋭く指摘したのは、哲学者戸坂潤である。美濃部の著書が発禁処分に付された一九三五年四月、戸坂は「政府当局は美濃部学説に対立するやうな学説を立てる意図はない」と云つてゐるらしい。冗談でもない限り、云ふまでもなくさういふことが出来る筈のものではない」と揶揄するようく論じ、アカデミズムの世界では一定の学説の否定は直ちに対立学説の構成を意味する以上、政府のなしうることは学説が統一されたかのような「外觀」を装うことには過ぎない、と説いてゐる。

た（行動）一九三五年五月号）。

アカデミズムの論理や慣行を尊重する素振りを見せながら、「国体明徴」に資すると思われる研究を「振興」するにはどうしたらよいのか。その方策の一つとして文部省が着手したのは、全国的学会の組織化だった。文部省は三六年度予算による事業として「学会ノ開催」という項目を立て、「広ク夫々関係ノ学者ヲ集メ本省主催シテ学会ヲ開催シ我ガ国体ヲ基トスル学問ノ發達ニ資セントス」という計画を立てた（国立公文書館所蔵「国体明徴ニ關スル各序ノ設施」）。當時の人文・社会系の「学会」の多くが実質的には各帝大の研究室内に組織されたものだつたことを考えれば、学閥原理を越える全国学会の組織は、学界関係者の機先を制した措置という側面をもつっていた。

この計画は、三六年九月に日本諸学振興委員会の設置として具體化された。文部省主催で学会を開催する当初の計画を変更

して、学者と文部官僚の寄り合いの所帯である「委員会」が主催する形式をとり、委員長には河原春作文部次官が就任、委員には哲学の田辺元、歴史学の黒板勝美、国文学の藤村作、教育学の吉田熊次など当時の学界の重鎮が数多く名を連ねた。東京帝大関係者の占める割合が大きかつたものの、他の帝大や官立單科大学、私学の教授陣も組み込むことにより、まがりになりにも全国学会としての体裁を整えようとした。

日本諸学振興委員会は教育学会を開催したのを手始めとして、哲学会、国語国文学会、歴史学会、経済学会、法学会、芸術学会、自然科学会、地理学会という順序で学会を開催した。四〇年度までは数年に一度というスロー・ペースだったが、四一年度以降はすべての学会をほぼ毎年度開催することとなつた。学問分野別では当時の東京帝大の講座編制で文学部の一学科に過ぎなかつた教育学や国語国文学に対し独自の学会という位

6月・7月の新刊

刀水歴史全書81

ギリシアの古代

歴史はどうのように

創られるのか？

R.オズボン著／佐藤 昇訳
古そ
典期までのギリシア史と、最新の成
果に基づいて語られる
四六上製 270頁 ￥2940

刀水歴史全書82

人種差別の世界史

白人性とは何か？

藤川隆男著 時代と共に変化
する人間社会、白人性の概念、
差別意識。身近な处から
四六上製 270頁 ￥2415

好評発売中

ヨーロッパの北の海

北海・バルト海の歴史
D.カービー、M.L.ヒンカネン
著／玉木俊明・牧野正憲・谷
澤毅・根本聰・柏倉知秀訳
北方ヨーロッパの自然環境、
人々の生き方、造船技術などの多面的世界を、一冊の本に
凝縮した海事史の決定版
A5上製 452頁 ￥6300

生まれる歴史、 創られる歴史

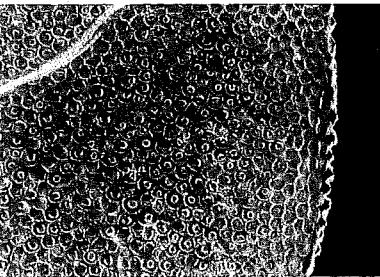
アジア・アフリカ史研究の
最前線から
永原陽子編 多様な史料を用
いて、アジア・アフリカの場で「歴
史」が描かれ創られていく過
程を論じる7人
A5上製 240頁 ￥3045

刀水書房

東京都千代田区西神田2-4-1
Tel. 03-3261-6190 Fax. 3261-2234

密に規定された学会参加者の変化によく表れている。当初の参加者は専門分野にかかる大学や中等学校の教員のほか、学校管理職や地方教育行政官も含まれていたが、四〇年度から後の人びとは傍聴者とされた。思想局・教学局と直結した監視役として各大学に配置されていた学生主事についても四三年度から傍聴者の扱いとなり、四四年度以降は傍聴者にも含まれなくなつた。監視の場としての機能が弱まつたものと思われる。

他方、四四年度から学会の趣旨説明から「国体ノ本義」という表現が消えて「時局下眞二国家ノ要請ニ応フル研究成果」という表現が用いられるうことになった。同年度から「日本諸学研究助成」が始まることになり、委員会が特定の研究課題とこれに従事する研究者を指定して研究費を交付することになった。ちなみに、この前年度には科学研究費が人文科学にも交付されることになり、その配分審査にあたる学術研究会議に人文科学部門が設けられた。「国家有用」の研究の「振興」を図ろうとする点で、日本諸学振興委員会と学術研究会議の事業は相互に重なりつつあつたといえる。ただし、学術研究会議の法学会委員（四四年四月任命）に美濃部達吉の後継者である宮沢俊義、あるいは田中耕太郎の名前を見出すことができるのに対し、これらの人びとが日本諸学振興委員会の委員として名を連ねることはなかつた。一〇年のあいだに委員会はその役割を微妙に変質させたにしても、天皇機関説事件への対応措置として設けられた来歴を消去することはできなかつたのであろう。



これは遺伝子導入していないペチュニアの花びら。その意味では何の変哲もないものだが、顕微鏡でのぞくと、そこには肉眼では見えない美しい世界が広がっている。左上をカーブして通り過ぎている輝線は維管束。修士論文に使った写真である。

塚谷裕一

植物学

しばし顕微鏡と別れる

修士課程に進学してからは、しばらく顕微鏡では結果が確かめられない実験が続いた。いわゆるDNAワークである。塩基配列情報を読みながら、特定の配列

を切るはずの制限酵素と、DNA断片同士をつなぐはずの連結酵素を使って、DNAの切り貼りを繰り返すわけだ。このとき、思い通りに切れたか否かは、比較的簡単に見て確かめることができる。しかし、その後つながったかどうかは、目で確かめることができない。つながつたはずのDNAを大腸菌に与えてみて、特定の培地の上で特定の反応をするものが生えてきたとき初めて、遺伝子組換えがうまく行つたらしくと分かるのである。

しかも本当にうまく行つたかどうかは、その大腸菌からDNAを取りだし、改めて調べてみないと確定しない。やると自体は比較的簡単なことばかりなのだが、その反面、うまく行かない場合は、何が悪いのかなかなか突き止められず、隔靴搔痒状態となる。

私もそんなトラップにはまつてずいぶん長いこと、やり直しを繰り返した。その間は見る機会もなかつた顕微鏡であつ

たが、この段階をうまく越してからは、改めて顕微鏡の出番がやつてきた。

設計通り遺伝子を組み込んだDNA分子ができたら、大腸菌を経由して、アグロバクターという、植物に寄生する細菌にバトンタッチさせる。するとこんどはアグロバクターが、そのDNAの特定の部分を切り出して、植物の核のDNAに組み入れてくれるのである。あとは除菌しつつ植物を培養して、再生を待てばよい。私の実験の場合、ペチュニアの花びらで、ある酵素が働くようになるはずであった。それを確かめるには、ある試薬を花びらに与えたとき、ジーンズと同じインジゴの藍に染まるかどうかを調べればよい。結果は成功。ただし染め方には一工夫がいることも分かつた。そのため染め直しを何度も行なつたが、青く光る細胞たちはとても美しく、いつ見ても飽きなかつた。やはり顕微鏡は見ているだけで楽しいものである。

駒込武・川村肇・奈須恵子編 戦時下学問の統制と動員

日本諸学振興委員会の研究

A5判・八〇〇頁・一二六〇〇円

東京大学出版会（表示は税込価格）

四六年、日本諸学振興委員会は廃止された。しかし、その事業は同年九月設置の文部省人文科学委員会に実質的に継承された。四八年に来日した米国人文科学会といふ民間団体が政府の財政的援助の下に学会を運営することを問題視したために人文科学委員会は解体、五〇年に日本人文科学会といふ民間団体に改組された。敗戦の五年後に、ようやく日本諸学振興委員会の事業は、一応の「終焉」を迎えたのである。

それにしても、天皇機関説事件以後の一〇年の経験は何だったのだろうか。それは学問の内容、研究と教育をめぐる体制にどのような刻印を残したのだろうか。「国家有用」の研究を「振興」することが戦後も自明の価値とされる状況のなかで、「学問研究の社会的有用性とは何か」という次元での省察を含む総括は不十分にしかなされてこなかつたのではないか。専門領域を越えた共同研究として、今後さらに深めていくべき課題と感じている。

（「まごめ・たけし 教育史）

